美少女条約

水城まりな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
　この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

美少女条約

【Ｎコード】

Ｎ３５３７ＢＡ

【作者名】

水城まりな

【あらすじ】

誰もが認める美少女・飛鳥は実は男！？と言うわけで今日も男子からの告白を断る飛鳥だったが、謎の美少年・皐月に秘密がバレてしまう。黙っている代わりに恋人になれと脅す皐月だったが、皐月は美少年ではなく「女の子が大好きな美少女」で……？
男女逆転☆どたばたコメディー！

偽りの美少女

「三好飛鳥（みよしあすか）さん！　俺と……俺と、付き合ってください！」

放課後の体育館裏。そこに呼び出されると、告白されるか決闘を叩き付けられるかで相場は決まっている。
そして私の場合、何故か最近では前者の理由で呼び出されることが増えていた。

「ご、ごめんなさい……。私、貴方とは付き合えませ……ん」

あぁ、申し訳ない。私なんかに告白して、しかも断られるなんて。本気で申し訳なくて何度も頭を下げると、私を呼び出した二組の鈴木くんは「いいんだ！　いいんだ！」と顔を赤くしたり青くしたりして連呼した。

「こ、こっちこそごめん。いきなり呼び出していきなり変なこと言って……」

それじゃあまた！　と早口で言って、鈴木くんは走り去っていった。
その背中を見つめ、私はもう一度「ごめんなさい」と呟く。

「……帰ろ」

中学生になって二度目の夏を迎えようとしている六月。
梅雨入りしたせいで最近は雨ばっかり。そんな毎日が続くと理由もなく落ち込んじゃう。

「あーすーかーっ！」

「わっ！」

憂鬱で仕方なくて溜め息をつきかけると、背後から誰かが飛びかかってきた。背中に全体重をかけられ、咄嗟に両足へ力を入れる。

「あっ、ありさ……！」

「やっほーう。まーた告られてたねぇ」

このモテモテめぇー！　と頬をつついてくるのは、幼なじみの永野（ながの）ありさ。幼稚園の時からずっと一緒なんだ。

「別に私、男の子にモテても嬉しくないもん……」

「まぁまぁ、そんなこと言わずにさー」

「もーっ、他人事だと思って！」

頬を膨らませて抗議すると、馬や犬にするように「どーどー」と両掌を突き付けてきた。しかも満面の笑みで。

かんっぜんに馬鹿にしてるな……！

「ありさのばーかっ！」

「知ってるよ、そんなこと」

ここで開き直らないでよ……。

がくりと肩を落とすと、あははと軽く笑われた。このありさの性格、ときどき羨ましくなっちゃうよ。

「ほら、帰ろ？」

「……うん」

差し出された手を掴み、校門に向かって歩き出す。

……ありさは、ずっと私と一緒にいてくれる。中学に入って何回か告白されて、しかも全部断って。いろんな噂をされてる私なのに、ずっとずっと一緒にいてくれるんだ。

「ごめんね、馬鹿って言っちゃって」
「えっ、なぁに。もう謝っちゃうの？」
「だって……」

うぅ、恥ずかしくて言葉が見つからないよぅ。

するとありさは悪戯っ子みたいに歯を見せて笑い、どんよりした雲を指差した。それにつられるように私も空を見上げる。

「明日は晴れるんだってさ！　土曜日だし、カラオケにでも行かない？　近くのゲーセンでプリも撮ってさー」
「えーっ、なにそれ。晴れるのにカラオケなの？」

ありさと手を繋いで家に帰ることも。休みの日にカラオケではしゃぐことも。
全部全部、楽しくて。それはきっと、今の「私」じゃないと経験できないことばかりなんだ。

だけど、ときどき思うんだ。

もしも私が「私」じゃなかったら、この世界は全く違う動きを見せるのかな……？

「とーもーかーくっ！　明日はあたしとデートだからね！　わかった？」
「はいはい、わかったってば。明日はありさとデート、ね」

確認するように復唱すると、ありさも納得してくれたみたい。うんうん、と頷いてから空いた左手で携帯を取り出した。

「ケータイにメモっとこうっと。何時にする？」
「うーん、何時でもいいけど……」
「それじゃあ九時半に迎えに行くねー。服も選んであげるから」
「えぇーっ、いいよー別に！」

中学に入ると学校には制服で通うようになったから、休みの日に私服で遊びに行く時はすっごく張り切るありさ。しかも自分のコーディネートじゃなくて私のを、だ。
別にいいよって何度も言ってるのに、私を着せ替え人形にして楽しんでるみたい。

「そろそろ夏服も揃えないとねー。服も見に行こっか？　コーディネートしてあげる！」
「えぇー。去年のでいいじゃん……」
「だーめっ！　今年は今年のトレンドがあるんだから」
トレンド……トレンドかぁ。今年の流行ってこと？
うーん、コーディネートって難しい……。

「女の子って服屋さん好きだよね……」
溜め息をつきながら思わず本音を溢せば、「なに言ってるのよ」とアリサも溜め息。
「それこそ他人事じゃないでしょーっ」
「わぁっ！」

かと思えば後ろから勢い良くスカートをめくられ、下半身に人工的な風が拭いた。自分では見えないから余計に恥ずかしい。
慌ててスカート越しにお尻を押さえて、背後に誰もいないことを確認する。

「なななななっ、なに……！」

顔が真っ赤になっていくのを自覚しながら、とりあえずありさに抗議をしてみる。
だけど、ありさは全然へっちゃら。けろっとした顔で私のリアクションを楽しんでいた。

「それじゃ、また明日ね」
「……うん」

すると、いつの間にか家は目の前。ありさの家はうちのお隣さんだ。

「ほーら。そんな顔しちゃ美人が台無しだぞー？」
「美人って……。ありさの方が可愛いよ」
「……もーっ」
当然のことを言い返しただけなのに、ありさは急に顔を赤くした。
ばいばい！　と言い残して自分の家の門に入っていく。ありさは変なとこで純粋みたい。

「……はぁっ」

さて。私も、とっとと家に入らなきゃ。
大きな溜め息を落として門に手をかける。何故か最近私に向かって

吠えるようになった愛犬を優しく撫でてから玄関に向かった。

——この世界で、きっと私は自分の家が一番大嫌いだ。

学校にいる方が楽しい。満員電車でもみくちゃにされている時の方が気が楽。そう思えるほど、私にとって家の中は息苦しいのだ。

「……ただいまー」

可愛い女の子を意識して作った声で挨拶する。

すると、リビングの奥から「おかえりなさい」と柔らかい声が返ってきた。

ナンパする美少年

「マジでごめんねっ、飛鳥！　明日は大丈夫だから……！」
「うん、うん。大丈夫だよ、一人で帰れるから」

休み明けの月曜日。実は学級委員長をしているありさは、いきなり放課後に開かれることが決まった委員会に参加することになった。そもそも、ありさと私はクラスが違う。だから放課後はありさと二人っきりになれる貴重な時間なんだけど、ワガママ言っても仕方ないしね。

「早く終わるんだったら待っててねって言えるんだけどなぁ……。飛鳥、今日はピアノの日でしょ？」
「うーん、そうなんだよね……」

六時からだからまだ時間に余裕はある。だけど、ありさが遅くなるんだったらレッスンに間に合わなくなっちゃう。そしたら母さんが怒るだろうしなぁ……。

「そんなに嫌なら参加しなくてもいいわよ」

教室の入口でありさを宥めていると、背後からいきなり声をかけられた。

「三嶋（みしま）さん……」
「と言うか、邪魔。教室から出るのか出ないのかはっきりしてくれる？」

後ろにいたのは、私のクラスの学級委員長の三嶋さんだった。

今日は日直でもあったから、今まで学級日誌を書いていたんだろう。右手に鞄、左手には学級日誌がある。

「ちょっと、なによ！　その言い方っ……」

「ごっ、ごめんね！　廊下に出て話すから……！」

三嶋さんに噛み付かんばかりの勢いで身を乗り出したありさを無理やり廊下に出し、慌てて笑顔を作る。

私の愛想笑いを見て不満そうに鼻を鳴らした三嶋さんは、人が一人通れるぐらいに空いたスペースを通って廊下に出た。一階の職員室の目の前にあたる西階段の方へ歩いて行く。

「……っかー！　ムカつくっ、あの女！」

私に抑えられて大人しくしていたありさは、三嶋さんの姿が見えなくなったのを確認してから暴言を吐いた。

「三嶋理恵子（みしまりえこ）、だっけ？　あいつ、なにかってーと飛鳥に絡んでくるよねぇ？」

「そ、そうかな……」

「そうよ！」

全くもう！　と地団駄を踏んだありさは、三嶋さんが消えていった方向を睨んだ。

そんなことないと思うけど、なぁ。それに、三嶋さんがイライラしちゃうのも仕方ないよ。私って、のろまだし。

「きっと妬んでるんだよ、飛鳥が可愛くてモテモテだから」

「……だから、そんなことないってば」

「そんなことあるの！」

ありさはそう言うけど、私は自分が可愛いなんて一度も思ったことがない。それに私、可愛いって言われるよりカッコいいって言われる方がいいもん。
なんでも即決して行動できるありさは、リーダーシップをとるのが上手くて「カッコいい」ってよく言われる。私もそんな人になりたいんだから。

「ともかく、気を付けなよ？　あいつ、気に食わない奴にはなにするかわかんないから」
「う、うん……」

気を付けるって、具体的にどう気を付けたらいいんだろう……。

全然見当がつかなかったけど、そんなこと言ったらありさが余計に心配しちゃう。そう思って口を閉ざした。

「って、ヤバ！　そろそろ行かなきゃ遅刻しちゃう！」

壁にかけられた時計を見上げたありさが、はっと思い出したようにリボンを結び直した。
同じ委員会の先輩は厳しくて、決められた通りにリボンを結んでないと注意されちゃうらしい。大変だなぁ。

「頑張ってね、ありさ」
「うん。飛鳥もピアノ頑張って」
「ありがとー」

お互いに手を振って、私はありさの姿が見えなくなるまで見送り続けた。

「……さて、帰ろっと」

早めに帰ってピアノの練習でもしようかな！
そう意気込んでから東階段の方へ歩いて行く。宿題になっているベートーベンをそっと口ずさんで、軽くスキップなんてしながら。

「ん？」

下駄箱で靴を履き替えてから校門に向かっていると、校門の前に二人の男の子が立っているのが見えた。楽しそうな笑い声が聞こえる。

「う、うわぁ……」

あれって、うちの制服じゃ……ないよね。うちってブレザーじゃないもん。て言うかあの二人、もしかして高校生？
平均よりもだいぶ身長が高めの茶髪の人と、私より少し大きいぐらいの黒髪の人がいる。こっちに背中を向けてるから顔は見えないけど。

誰か待ってるのかなぁ。うぅ、通りにくい……けど……。
……なにげなく通ったら大丈夫だよね！　そう、なにげなく！

意を決して、さっさと通りすぎてしまおうと足を早めた。

「あっ、松宮！　この子じゃね？」

そして、更に気配を消すように息を潜めたのに。
二人の前を通りすぎようとすると、茶髪の人が声を上げた。それに反応した黒髪の人も私に視線を向けるのがわかって、思わず足を止

めてしまう。

「……あぁ、ビンゴだ」

心が落ち着く、中性的に響いてくる穏やかな声。視線を向けた先の、少し悪巧みが含まれたような繊細な笑顔……。

「きれい……」

思わずそう溢してしまうほどの美少年がそこに立っていた。

「ん？　もしかして今の、俺を見ての感想だったりする？」

思ったことをそのまま口にすると、きれいなその人が顔を近付けてきた。

ふわり、と爽やかな香りがする。香水かなにかかな……？

「……もしもーし？　君、大丈夫？　顔が真っ赤だけど」

顔の前で手を振られて、はっと我に返った。

……て、顔が近っ！

「あああああの、ごめんにゃ、じゃなくて……ごめんな、さい！」

慌てて距離をとってから謝るものの、大事なところで噛んでしまったから真剣さが伝わらなかったかもしれない。

ど、どうしよぉ。動揺しすぎて呂律が回らないよぅ。

「ははっ、なんで謝るんだよ？　褒めてくれたんだろ？」

「うぁ……。あ、えと……」

明らかに怪しい私を見ても、彼は爽やかに笑ってくれた。だけど私の顔はどんどん赤くなっていく。
はっ、恥ずかしい……！　なんで私、こんなにドキドキしてるのっ！
「ねぇ、三好飛鳥ちゃんだよね？」
「……え？」
火照る頬に掌を当てて冷ましていると、茶髪の人も私に歩み寄ってきた。

「ど、どうして私の名前……」
「だってさぁ、君って超可愛いじゃん？　この辺じゃ結構有名なんだよー？」
「はぁ……」

いやだから、可愛いって言われても嬉しくないんですけど。
眉を寄せつつ曖昧な返事をすると、「そういうカオもいいよ！」とにこっと笑いかけられた。色素の薄い目が緩く細められる。……黒髪の人がきれいすぎるから比較するのが可哀想だけど、この人もモテそうな顔立ちしてるなぁ。

「おいこら、新倉（にいくら）。俺が先に目ぇ付けたんだから横取りするなよ」
すると、黒髪の人が不機嫌そうな顔をして茶髪の人の肩を掴んだ。
茶髪の人はニイクラっていう名前みたい。……友達になる予定なんてないから覚えなくてもいいだろうけど。
「ちぇーっ。なんだよぉ、ちょっとぐらいいいじゃんかー」

肩を掴んでいる手を軽く払いのけた新倉さんは、一歩下がって黒髪の人の背後に立った。

「さて、飛鳥ちゃん。いきなりだけど本題ね」

「は、はい」

にっこり笑った黒髪の人は、イギリスにいるようなジェントルマンがするように優しく私の右手をすくい上げた。手の甲にキスでもされるんじゃないかという雰囲気に身を固くする。

「俺の名前は松宮皐月（まつみやさつき）。歳は十七、高校二年生だ」

「っ！」

ちゃんと身構えていたのに。

黒髪の人――松宮皐月は、私の手の甲にキスをした。手の甲にするキスにどんな意味が含まれているのかなんて、私にはわからないけど……。

「今日、君をナンパしに来たよ」

にっこり笑った松宮さんは、意味がわからないことを口走った。

「……は？」

「ナンパだよ。な、ん、ぱ」

わざわざ区切ってその単語を復唱してみせた松宮さんは、相当間抜けになっているだろう私の顔を見て小さく笑った。

「飛鳥ちゃんに一目惚れして……。リサーチして名前調べて、ようやく学校まで突き止めた」

ちょっと待って。ちょっと待って！

ナンパってなんだっけ？　男の子が女の子を口説く……アレだよね？　私、もしかしてそれをされてるの？　て言うか、ナンパってこんなに事前調査が必要なものなの……？

「あああああああのっ！」
「ん？」
「わたっ、私……！　貴方とはお付き合いできませんっ！」

だからごめんなさい！　と頭を下げると、頭上から松宮さんの困ったような声が聞こえてきた。

「どうして？」
「……ど、どうしても……デス」

膝を掴み、地面とこんにちは。

告白された時、私は決まってこのポーズをとる。理由は簡単、ここまで大袈裟にしたらほとんどの男の子が諦めてくれるからだ。

「まだ出会ったばかりだから？」

だけど松宮さんは諦めてくれなかった。

「……はい」
「俺のことをなにも知らないから？」
「はい」

「飛鳥ちゃんが男の子だから？」
「はい」

……ん？

「って、なななななに言ってるんですか！」

勢いで返事しちゃったじゃん！　なに言ってるの、この人！
いろいろツッコみたくて頭を上げると、にんまりと意地悪っぽく笑った松宮さんと目が合った。

「……男、なんだよな？　三好飛鳥……くん？」
「……っな……」

確信を持った力強い瞳を見て、体が硬直した。
額に汗が滲み、鼓動のスピードが増す。現実を見たくなくて吐き気までしてきた。

「っな、に……言ってるんですか？　そんなわけないじゃないですか、スカート履いて学校に通ってるのに」

そうだよ。私は女の子だもん。
大きくなったら母さんみたいになりたい、って小学生の頃に言ってて。父さんみたいな人と結婚したいなぁなんて夢を語って。

そんな私が男の子なわけが……。

「隠しても無駄だぞ？　言っただろう、調べはついてるんだ」
松宮さんの白く細い、女の子みたいな手が私の肩から腕へ滑る。

「……場所を変えようか。飛鳥ちゃん？」

右手を掴まれ、にっこりと笑いかけられる。

私は、その笑顔に逆らうことができなかった――……。

驚く美少女

「ここなら誰も来ないから」

そう言って松宮さんが私を連れてきたのは、繁華街にある怪しげなホテルの一室だった。新倉さんは帰ってしまって、怪しげな空間には私と松宮さんだけ。

ビジネスだから大丈夫だって言うけど……。お姫様が住んでるみたいなお城の外見のビジネスホテルなんてあるわけないもん。

「来いよ、飛鳥ちゃん？」

ネクタイを緩めてベッドに腰かけた松宮さんが手招きしてくる。

ドアの前で立ち止まっていた私は、じりじりと松宮さんに近付いていく。瞳を甘くして私を待つ松宮さんは、楽しくて仕方ないと言いたげな表情をしていた。

「小さいよな、飛鳥ちゃんって」

「わっ！」

松宮さんの目の前までやって来ると、不意に伸びてきた腕が私を抱きしめた。

胸に顔を押し付け、腰に手を添えられる。

「やっぱり……胸、ぺったんこだな」

「……っ……！」

からかうように笑う松宮さんが私の胸をまさぐる。

だって……そんなの、ぺったんこに決まってる。だって私は……い

や、僕は《・・》。

「……仕方ないじゃないか、男なんだから」

無理にトーンを上げていた声を地声に戻すと、松宮さんの右手の動きが止まった。

「ふーん……？　地声じゃなかったんだな」
「最近、僕が地声で話すと母さんがうるさいんだ」

声変わりはまだみたいだけど、と言うと松宮さんは何故か更に力を入れて腰を掴んできた。……どうやら離してくれるつもりはないみたい。

僕は抵抗することを諦め、バランスを保つために彼の背中に手を回した。

「お母さん、に言われて女装してるのか？」
「……そ、それは……」

今日会ったばかりの人にそこまで話すのはさすがに戸惑われ、言葉に詰まる。

すると松宮さんは僕の背中を優しく撫で、「大丈夫だよ」と囁いた。

その声が予想外に優しくて、背中が小さく震える。

「話したくないなら話さなくていい。……話せるようになったら話してくれればいいから」
「松宮さん……」

この人はいったい、なにを考えているんだろう。僕が男だって知っていたなら「ナンパ」はおかしいし……。

そもそも、どうしてこんなホテルに連れてきたんだろう？

そこまで考えてから、すごく恥ずかしい格好をしてしまっていたのに気付く。だって僕、松宮さんの右膝を跨いで膝立ちしてる状態なんだもん。

「あ、あの……。すいません、そろそろ離し……」
「なぁ、飛鳥ちゃん」
「え？」

だけど松宮さんは僕の言葉を遮り、胸元の赤いリボンを勢い良く引き抜いた。

「なっ……！　松宮さん！」
「改めて言うけど、俺と付き合ってくれない？」

——はい？

「な、なに言って……。僕は男なんですよ！」
「知ってる。だけど仕方ないだろ、俺の好みにドストライクなんだから」
「うわっ！」

いろいろな意味で問題発言をしたかと思えば、松宮さんがいきなりベッドに仰向けになった。腰を掴まれていた僕も、松宮さんを押し倒すような形でベッドに崩れ落ちてしまう。

「ま、松宮さっ……！」

その辺の女の子よりも白く、きれいな肌が目の前にある。顔も中性的だし、松宮さんみたいな人が女装したら似合うんだろうなぁ。僕もこんなにきれいな顔だったら母さんに文句言われないだろうし。

「可愛い顔してるな、飛鳥ちゃん。男っていうのが信じられないぐらい……」

「……っ……！」

耳元に甘く囁かれ、背筋がぞくっと震えた。一段と低く、深い声。色気も孕んだそれは僕をおかしくしてしまいそうで……。

……って、なに考えてるんだ！

僕は男だ。そして、もちろん松宮さんも男だ。それなのに、どうしてこんなに心臓がドキドキうるさいんだ――？

「なぁ、責任とれよ」
「せ、責任？」
「そう、責任。……て言うか、飛鳥ちゃんにとってもいい話だと思うけど？」

松宮さんの右手が頬に触れ、顎に滑り落ちていく。

「いい話……って、どういうことですか？」

探り探り尋ねると、まるで猫にするように顎を撫でられた。体を捩

らせると、優しく目を細めて髪の毛に指を絡ませてくる。
肩まで伸ばして、女の子みたいにちゃんと整えた髪の毛。だけど、男だと知られた上でこんなに愛おしそうに触れられると恥ずかしい。
「よく男に告白されるんだろ？　だけど、俺と付き合ってるって公言すればそれも少なくなるだろうってこと」
全くなくなることはないだろうけどな、と笑う表情は少し幼く見えてドキッとしてしまう。
……でも、待って？　と言うことは、それって……。
「恋人のフリをする……ってこと？」
「そうなるな」
しれっとした顔で答えられて、用意していた言葉が全て無意味に崩れていってしまった。
「で、でも……。それって松宮さんが得することあるんですか？」
確かにこんなにカッコいい人が彼氏だって言ったら告白してくる人はぐんと減るだろう。
だけど、松宮さんは？　男同士で付き合ってるってバレて気持ち悪がられちゃうかもしれないのに……。
「得すること……あるよ？」
「っ！」
髪の毛を弄っていた右手がまた頬に触れる。さっきみたいに擽られるのかと思って身構えていると、きれいな顔が更に近付いてきた。
反射的に目を瞑ると、なにか柔らかいもので唇を塞がれる。

「……っ……！」

指でも押し付けられたのかと思って目を開けると、松宮さんの長い睫毛がふわりと揺れて瞼が閉じられた。
さっき「ぺったんこ」だと言われた胸に右手が這い、左手は腰を撫で回す。驚きすぎて固まっていると、チュッと可愛らしいリップ音をたてて松宮さんが離れていった。

「……こういうこと、できるしな？」
「……っ……！」

にやりと不敵に笑い、松宮さんはわざといやらしく指で唇を拭った。平たく言うなら、そう……。僕は今、この人にキスをされたのだ。

「ま、松宮さんってホモなんですか！」
「はぁ？　ちげーし。だって俺、女の子大好きだもん」
「それならどうして……っ！」

自分の右手で唇を塞ぎ、松宮さんをじっと見る。
信じられない……。だって僕、ファーストキス……だったのに。

「言っただろ？　顔が好みだって」

松宮さんはそう言って、また僕にキスをした。

首筋に、頬に、瞼に。唇を塞いでいる右手に。

「俺のこと……、利用していいんだぞ？」
「……」

よく、わからない。この人はなにを目的にしているんだろう。
いくら顔が好みだって言っても、僕は男なのに。松宮さんはそれを知ってるのに。
「松宮さんには……か、彼女いないんですか？」
「別れたよ。飛鳥ちゃんのために」
……ますますわからなくなった。
「美少女条約っていうのはどう？」
「は？」
目の前の男についてぐるぐる考え込んでいると、不意に変な単語が聞こえてきた。
隠さずに怪訝そうな声音で聞き返すと、その単語を発した彼は軽く笑った。
「もしも付き合ってくれたら、俺が飛鳥ちゃんを完璧な美少女にしてやる。外見についても、世間的にも。……どう？」
可愛い、可愛い、美少女に。「あの人」のように。呪文のように繰り返されてきた言葉。
もしも今、この人が言うことに頷いたら……。僕はちゃんとした美少女になれるのかな？
「本当、に？」
「あぁ、約束する」
いい女にしてやるよ、と笑って優しく額にキスをされた。

……この人、やっぱりモテるんだろうなぁ。どんな女の子でも陥落しちゃうような、そんな仕草や言葉を熟知してる気がする。そんな人が僕を美少女にしてくれる……？
彼の言葉を信用してもいいのかもしれない。たとえ騙されていたとしても、きっと僕をちゃんとした女の子として扱ってくれるような気がする。
たとえ彼によって軽蔑の目に晒されることになったとしても、僕が「女の子」でいる限りは避けられない事態だから文句は言えない。
「……僕は、どうすればいいんですか？」
決意を固めて尋ねると、松宮さんはゆっくりと瞬きをしてから目を細めた。
そうだな、と小さく呟いてから自分の顎を撫でる。まるで名探偵が難事件を推理するように。
「飛鳥ちゃんは……俺の言うことを聞いていればいい。ただし、男子に呼び出されたら俺の名前を出して構わない。証拠がほしけりゃプリクラでもなんでも撮ってやるさ。あとは……そうだな、放課後は毎日迎えに行くよ」
「え……。それだけでいいんですか？」
もっと無理難題を突き付けられるかと思ってたのに、松宮さんが言ったのは僕でも簡単にできそうなことだけだった。
呆気にとられて間抜けな声を出すと、くすっと笑われる。
「それじゃあ、もう一つ条件を付けようか。週に一度、土曜日か日曜日。俺とデートすること！」
「えぇっ！」

「あ、もちろん私服ね。ついでに、俺が好きな色はピンクだから」
ピンク？　そ、そんな恥ずかしい格好してこの人とデートだって……！
確かに家の中ではそういう格好してるけど、でも……。
「い、嫌です……恥ずかしいから」
「そう？　飛鳥ちゃん、美少女だから似合うと思うけどなぁ」
「……嬉しくないです」
美少女にはなりたいけど、男だって知ってる人に美少女だって言われるのはなんだか複雑だ。

「……じゃあ、明日」
「え？」
「明日の放課後、一緒に買いに行こうか？　ついでにプリクラ撮ったりしよう」

それはもちろん、スカートを……ってことだよね……？
口には出さなかったけど松宮さんには伝わったみたいで、満足そうに微笑まれた。うぅ、無駄にカッコいいのがなんかムカつく。
「いいじゃん、制服でスカート履いてるんだから違和感はないだろ？」
「そ、そりゃあ……そうですけど」
制服は中学からずっとスカートだから、もうとっくに違和感はなくなってる。それに、家でも履かされてるし。
だけど……。外でもスカートを履いちゃうと、僕の中のなにかが崩壊しそうなんだもん。

「どうしてもスカートじゃなきゃ駄目なんですか……？」
「あぁ。それが条約締結の条件だからな」

にこにこ笑う松宮さん。悩みに悩む僕。
答えはもう、ほとんど出ていた。

「わかりました……」
「よーっし、いい子だ！　それじゃあ、最後に一つだけ」
「え？」

おもむろに僕の右手首を掴んだ松宮さんは、空いた左手で自分のネクタイを外した。さっき緩めていたせいですぐに解ける。
松宮さんの手によってベッドの下に落とされたネクタイを目で追っていると、掴まれていた手が松宮さんの胸に押し付けられた。

「ちょっ、なにを……！」

筋肉質で固い胸板を想像していたけど、松宮さんの胸はそんなに固くなかった。むしろ柔らかいかもしれない。
まぁ、この顔で筋肉隆々だったらコンプレックス刺激されまくりで泣きたくなるから別にいいんだけど。

「……あぁ、くそ。最悪。気付かない？」
「え……？」

忌々しそうに舌打ちをした松宮さんは、片手でシャツのボタンを乱暴に外した。

「なっ、なななにしてるんですか！」

「黙って……ほら、」

何故か少し怒ったような表情になった松宮さんは、遂に両手で僕の右手で掴んだ。はだけたシャツの隙間から僕の右手を滑り込ませ、肌着の上から松宮さんの胸に触れる形になる。

あれ？　松宮さん、もしかして僕より筋肉ないんじゃ……。

そこまで考えたところで、とある仮説が僕の頭に過ぎる。

い、いやいやいやいや。そんなわけがない。だって松宮さんは僕よりカッコいいし、声だって僕より低いぐらいだし……。でも、

それなら、この膨らみはなんなんだ？

「……やっと気付いた？」

「わっ……！」

ふふっ、とやけに可愛らしく笑った松宮さんは漸く僕の右手を解放してくれた。

「俺は……いや、」

ごほん、とひとつ咳払いをした松宮さんは一瞬だけ目を閉じてから改めて僕を見た。口元に添えられていた手が離れる。

「私は女よ、正真正銘の」

一人称だけでなく口調まで変えた松宮さんは、数秒前までとは別人

のような声で話し始めた。鈴の鳴るような、透き通ったような声で。

「う、嘘だ……」

「本当だってば。飛鳥ちゃん、私の胸触ったでしょう？」

「なっ……！　あ、あれは松宮さんが！」

声が変わると表情まで違って見えるような気がして、なんだか一気にドキドキしてきた。

女装が似合いそう……だなんて思って見てたけど、それは当然だったんだ。松宮さんは僕とは違う、ホンモノの女の子だったんだ……！

「な、なんで男装なんか……！」

思わず聞いてしまってから後悔した。

だって、さっき僕も同じ質問をされたから。そして僕は、その質問に答えられなかったから……。

「秘密。飛鳥ちゃんが教えてくれるんだったら教えてあげてもいいけど？」

「……デスヨネ」

しゅんと肩を落とした僕を見て、松宮さんはぽんっと両手を叩いた。

「あ、言っとくけど私は本当に飛鳥ちゃんに恋してるわけじゃないからね？　最初から美少女な飛鳥ちゃんにしか興味ないし」

「はぁ……」

男でも女でも松宮さんは辛辣だ。

……泣いてもいいよね？

「だって私、女の子が大好きだし」
「……は？」
「さっきも言ったでしょ？」
にっこりと笑った松宮さんは、僕の頬を優しく撫でた。手つきが優しすぎてくすぐったい。
「私は女の子が大好きなの。んで、飛鳥ちゃんは私の好みにドストライクなわけ。女の子じゃないってことを除けばね。……責任、とってくれるでしょ？」
――なんだかややこしいことに巻き込まれてしまったようだ！

驚く美少女（後書き）

飛鳥くんと皐月ちゃん、です。よろしくお願いします！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3537ba/

美少女条約

2012年1月9日03時48分発行